

★ 法 誓 寺 自 治 会 ★



昭和60年3月法誓寺集会所の開所により独立した自治会の設立が話題になりました。その後、関係各位の努力により、地域住民の願いが叶い、平成7年に元村中央自治会から分離独立し、村内23番目の自治会として法誓寺自治会が誕生しました。その当時の世帯数は714世帯でしたが、現在では854世帯まで増えています。地区中心部に盛岡市立北陵中学校があることや盛岡市に隣接していることなどから、日常の生活等で村内外の交流や出入りがある中で、役員をはじめ地域一体となって事業に取り組んでまいりました。

振り返ると地域が一体となって連携をより深めるきっかけとなった気がしますが、平成14年7月に発生した台風により、木賊川が増水し一部地域に浸水する出来事がありました。自治会として緊急時における対策が万全だったか心配な面もありますが、避難誘導や炊き出しなどの地域住民の連携と自衛隊及び消防団の支援により、被害は最少限に食い止めることができました。自治会の大きな行事である運動会や堤防の清掃にはたくさんの方が参加しますが、この二つ事業の際は、子ども達にお昼を出しています。当自治会から転入された方から、とても温かいもてなしだというお言葉をいただき、何とか継続したいと考えていますし、この活動が水害時の炊き出しに役立ったのではと思っています。

永年の懸案事項であった木賊川に架かる俗称「ゆずり橋」が改修整備され平成18年5月に「法誓寺橋」が開通しました。また、今年平成23年には、たびたび洪水により浸水被害が発生した木賊川の水害を防ぐための木賊川分水路が完成し、地域の安全安心な生活を守ることができるようになり、関係各位の格別のご配慮に心から感謝する次第です。

今後も自治会の事業を地域全体で盛り上げていくとともに、法誓寺自治会の素晴らしい活動が次世代へ引き継ぐことができるよう自治会活動に取り組んでまいります。

◎座談会を行いました



◎東日本大震災を振り返って

司会 3月11日に東日本大震災が発生した際、皆さんは何をされていましたか。

A 私は家にいました。あまりの揺れの大きさに下駄箱に手をかけたまま動けなくて外に出られませんでした。

A 私も同じです。リビングに夫婦でおり、茶箆箆やテレビが倒れないように押さえることで精一杯でした。

A 仕事で外に出ていましたが、停電のため信号も動かず、職場に戻るのも大変でした。真っ暗な中、家に帰るのも苦労しました。携帯も通じない中、県外にいる兄から電話がかかってきて、テレビを見たら大変な事態になっているが大丈夫かと言われ、何も分からずとても不安でした。

司会 今回の震災をきっかけに当自治会の防災に関する考え方について話し合い、震度5以上あった場合は、役員は法誓寺集会所に全員集まるという意見が出されました。

A 震災時は、連絡が取れないことが課題でした。今回のような事態の場合は集会所にまず集まるという考えは良いと思います。

司会 今回の震災時の対応を振り返り、課題についてはどう考えますか。

A 要援護者や高齢者の状況確認の方法が課題だと思います。民生委員だけではとても大変だと感じました。

司会 防災という観点からはいかがですか。

A 何か起きたならば、まずはこの集会所に集まるシステムの構築が必要だと思います。要援護者をどうするかその場で検討することもできるし、いずれ集まった役員で話し合い的確な指示を出すことが大切だと思います。災害時は、炊き出し等のこともあります。役員の力だけではなく、地域の方の力も必要になってきます。奥様方や若い方も加わってもらい、作業を分担する防災システムを考えないと、大きな震災が起きたときに対応できなくなると思います。民生委員が地域を回るという話しがありました。民生委員さんに何か起こる場合もあることを考えれば、まずはこの集会所に集まって、回れる方で支援が必要な方を把握すれば良いと思います。そういう意味でも、まずはここに集まることが重要だと思います。様々なシミュレーションを重ねていく必要がありますし、若い方々を巻き込んでいながら、若い世代にも手法を引き継いでいかなければならないと考えます。

司会 実際、隣近所の方々のことを良く知っているのは班長ですから、班長と連携することも大切ですね。

A 班長さんが一番近所の方の情報を知っていますので、安否の確認等はやはり班長の協力が必要だと思います。班の中で話し合い、役割分担等ができれば一番良いと思います。

司会 本日の提案をまとめますと、災害が起きたならば、まずは集会所に集まるという仕組み作りが必要だと思いますし、その仕組みを若い世代へも引き継いでいくことも大切だという話しがありました。若い方を巻き込んで一緒に防災について考えるとともに、何かあったら頼りになるは隣近所の方ということを確認した今、常日頃の班づくりを大切にしながら、今後の防災訓練に生かしていきましょう。